

先週、7月7日、愛知県美術館で現代美術家協会の現展をみてきました。PAL 研究会と倫理法人会の仲間である、肥田和明君の入選作を見るのが目的です。肥田君の絵には、新人賞と会友推挙の札がついていました。肥田君おめでとうございます。

絵画の鑑賞は、脳で言えばまさに右脳の領域です。右脳は空間認識を司るからです。時々、絵を見ても良く分からないという方が見えます。彼らは、難しく理屈で考えようとしているのです。なんでも左脳による理屈で考えようとするのは皆さんの悪い癖です。

それでは、絵の良い悪いはどのようにすれば判断できるのでしょうか？これは我々、素人の特権で“何となく好き”で良いのです。まさに、大脳辺縁系の扁桃核を中心とした快か不快かで判断すれば良いのです。逆に評論家は、そこに理屈をつける必要があるのです。まさに大脳皮質での理屈付けを行う姿は滑稽ですし、可愛そうです。

絵に関心が出てくると、レストラン、ゴルフ場、ホテルといった多くの場所に絵が飾られている事に気づきます。そんな絵を全く認識せずに人生を終えるか否かは、個人の自由です。しかし同じ人生、絵だけでなく音楽や、映画などの文化にも関わることは認知症予防にもなるのです。皆さん是非、多くの絵に親しむ事で、右脳と大脳辺縁系の扁桃核に刺激を与えてみませんか？

肥田君の絵を見に行く前に、松坂屋南館で三岸節子展も見てきました。三岸節子さんは愛知県の一宮生まれの画家です。戦後、花の絵などで一躍、人気作家になりました。ちなみに、リトグラフですが、彼女の薔薇という作品は、ナーシングデイに寄贈してあります。残念ながら、職員の評価は今一つようです。皆の、扁桃核は刺激しないようです。

ちなみに今回の展覧会は、彼女の明治、大正、昭和、平成の各時代の代表作品でたどったものでした。その中で凄いのは、彼女が 63 歳のときに新境地を求めて、渡仏している事です。その時の日記が凄い。紹介すると『私の運命は好んで困難な道を歩む。私の性格がかく追い込むのか。運命のいたらしめるところか。そのいずれかでもあろう。勇気をふるって全努力を傾けなければ、敗者たるを免れぬ。ひとたびヨーロッパにきたからには、新しい境地を切り開かねばならぬ。新鮮な世界、これさえ成就できれば生甲斐である。なんという難しい世界か、しかしやり遂げねば。カーニユに死すともよし』

凄い文章だと思いませんか？明治生まれの女性が、60 歳を過ぎてもこの向上心。やり遂げねば、死んでもよいとの決意。

ところで、当日は、三岸節子さんのお孫さんの太郎さんが、おばあさんの思い出話をされていました。周りの人を、自分のために働かせる事がとても上手い人であったと言われていました。言い換えると“暴君”だとも言われていました。私の経験ですが、“節子”という名前の方は、とてもしっかりしていると思います。講演でも、この話をすると多くの聴衆が納得されます。ちなみに私の母も、節子です。ちなみに真年です……。

1) 絵を見ても良く分からないという人の理由は？

()

2) 絵の良い悪いはどのようにすれば判断できるのでしょうか？

()

3) 皆さんの知っている“節子”さんは？ 以下から選んでください。

その他は、何か性格を書いてください。

知っている節子さんがいない とてもしっかりしている
優しい その他



(社員教育用)